ジェファソンの自然観

——アメリカ啓蒙思想についての一考察——

明　石　紀　雄

はじめに

15世紀末にコロンブスによって発見されたアメリカは，その後数世紀にわたってヨーロッパ人のイマジネイションの中に，あるいは「約束の地」として，あるいは「第二のエデン」として存在することになった。多くの人びとがそこに理想的国家をうち立てるために，あるいは個人的成功を夢みて，海を越えて移住した。移住にともなう困難や開拓の苦しさを彼らが耐えることができたのは，彼らに，ヨーロッパでは満たされなかった計画や夢がアメリカではかなえられるという確信があったからである。またアメリカは常に，ヨーロッパの「旧」世界に対して「新」世界として意識されたが，それは集団のレベルにおいては新しい社会をアメリカにおいて作り出すことを意味し，個人のレベルにおいては古い社会のきづなから解放された新たな人生の出発点を意味するものであった。[1)]

アメリカは，選ばれた人びとが住む選ばれた国であるという思想は当然，実際にアメリカに移住するものにも引き継がれ，彼らの思想や行動の理念的根拠となった。これは，のちに独立してアメリカ合衆国となるイギリス植民地への移住者および彼らの子孫の間に，とくに顕著な傾向であった。

アメリカは特別の使命をもって生まれた国であるという意識は，植民の当初から根強いものであった。それと同時に，アメリカに住む人びと(アメリカ人)の中に，自分たちは世界の他の人間とは異なった資質の人間であるという意識もあった。このような意識の形成はいろいろな要因の影響によるものであろうと考えられる。たとえば移住の宗教的動機，アメリカにおける経済的成功の数多くの例などをあげることができよう。しかし，アメリカの自然の影響をも無視することはできないであろう。いいかえればアメリカが自然に恵まれていたこと，つまり気候風土が快適であり天然資源が豊富であったことが，アメリカの開拓を可能ならしめたとともに，アメリカは特別の国であるという意識をそこに住む人びとの心の中に植えつけたのである。

恵まれた自然環境がアメリカの発展を助長する一方，アメリカ人は彼らの周囲の自然に対して新たな関心を抱くようになった。そこからアメリカの自然は，ヨーロッパのそれとは大いに異なるという考え方が出てきたのであるが，ここにアメリカ特有の自然に対する態度——自然観——が生まれる背景があったのである。

本稿の目的は，18世紀の啓蒙思想の時代におけるアメリカ人の自然観を，いく人かの代表的な思想家を選ぶことによって検討してみようと思うものである。とくにトーマス・ジェファソン（Thomas Jefferson）のアメリカ自然観を中心に検討してみたいと思うのであるが，この点に関して彼のいわゆる農本主義——かりに彼

---

1) アメリカとパラダイス思想の関係については，Charles L. Sanford, *The Quest for Paradise: Europe and the Paradise: Europe and the American Moral Imagination* (Urbana, Ill., 1961), Chs. 5 & 6 が詳しい。Sanfordは「エデンの神話」("the Myth of Eden") という言葉も使っている。

が農本主義者であったと仮定して——の思想的根源をもあわせて考察してみたい。主に，彼の『ヴアージニアについての覚え書』をもとにするが，これまで比較的注意がはらわれなかった文学的見地から，この著作の中心テーマを分析したいという意図もあるのである。

本論に入る前に，本稿が基づいている前提を明確にしておく必要があろう。

(1) 自然観は一つの思想状況であること。いいかえれば，人の自然に対する態度の中に，その人の人生観，世界観，価値観が表現されるという意味である。とくに，自然に単なる審美的価値のみならず，道徳的，宗教的，政治的価値を見出そうとする場合，自然観はその人の道徳観，宗教思想，政治思想と密接な関係がある。ジェファソンのアメリカ自然観についていえば，われわれはその中に広い意味での彼のアメリカ観——その存在意義，使命など——をうかがうことができよう。彼の自然観を知ることは，究極的には彼の人間像を理解するのに役立つ，いなほとんど不可欠である，とさえ考えざるをえないのである。

(2) 18世紀にアメリカ人の自然観に大きな変化が現われたこと。18世紀は一般に「理性の時代」あるいは「啓蒙思想の時代」といわれているが，それは西欧社会に「理性」とか「進歩」とかを基礎概念にする新しい思想が生まれたことを意味する。アメリカもその例外ではなかった。しかし政治的，文化的にようやく成熟し始めたアメリカでは，啓蒙思想はヨーロッパとは異なった道をたどって発展した。それと並行してアメリカ特有の自然観が生まれたのであるが，これは新しく芽生えた国民意識・使命観とは無関係ではなかった。アメリカの自然環境がこのような意識の形成に影響があったとするならば，アメリカ啓蒙思想における自然観を究明することの意義はここにも認められるのである。

1. 荒野イメージと田園イメージ

その発見以来アメリカについては二つの相異なるイメージが存在した。一つはそれを「獣のほえる荒れ地」(“a howling desert”)とみる，いわば荒野としてのイメージであり，他の一つは「世界の庭」(“the Garden of the World”)とみるいわば田園としてのイメージであった。[2)]

この二つのイメージが互いに矛盾したものであるのは明きらかである。しかし二つのイメージのうち，どちらがより正しくアメリカの実際の姿を表わしているか，すなわちアメリカは荒野的であったかそれとも田園的であったか，をせんさくすることはここでは重要な問題ではない。むしろ，それぞれのイメージがどう形成されたのか，それらはアメリカ人の行動にどのような影響を及ぼしたかをみることのほうが，ジェファソンの自然観を理解するうえにより有効なアプローチのように思われるのである。

荒野としてのアメリカのイメージも田園としてのアメリカのイメージも，究極的には，人間の理想郷へのやむことのない追求にその起源をたどることができよう。人間は，何ものにも束縛されない自由，労働からの解放と豊かな生活を常に夢みるものである。現実の問題が耐えら

---

2) 荒野イメージ (the wilderness image) および田園イメージ (the garden image) についてのディスカッションは，Leo Marx, *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America* (New York, 1964), pp. 42～3 の示唆による。

アメリカの自然についてのイメージ研究には，その他に Henry Nash Smith, *Virgin Land: The American West as Symbol and Myth* (Cambridge, Mass., 1950); Arthur K. Moore, *The Frontier Mind: A Cultural Analysis of the Kentucky Frontiersman* (Louisville, Ky., 1957) などがある。Marx と Smith は田園イメージを強調しているが，Moore はむしろ彼のテーマの関係から「原始林」(“the primeval forest”) としてアメリカの自然に言及している。Marx は「牧歌的」(“pastoral”), Nash は「世界の庭」(“the Garden of the World”) という言葉を使って，田園イメージをさらに詳細に描写しようとしている。

れぬほど抑圧的で生活が非常にきびしい時は，このような夢はより強いものになる。この理想郷追求の夢は，しばしば人間をして，かつて存在したにちがいないパラダイス（楽園）の復活を願うようにしむけることがある。いわば未来のユートピアを夢みながらも，過去にその原型を求めるのである。

アメリカについてのイメージ形成も，このようなパラダイス復活の夢と密接な関係があった。多くのヨーロッパ人が，複雑で腐敗したヨーロッパの社会に不満を感じ，単純ではあるが人間が幸福な生活を営むことができた，今は失なわれた「自然の状態」への復帰を望んでいた。そして彼らは，このような「状態」はアメリカに行けば見出すことができると考えていた。たとえばジョン・ロック（John Locke）はこういっている。「はじめは世界はすべてアメリカのようであった」と。[3]

しかし，そのアメリカが荒野に近いのか，それとも田園に近いのか，つまりアメリカについて人びとがいかなるイメージをもつようになったかは，彼らがアメリカに何を期待するかによって決定された。いいかえればアメリカの自然は見る人によってそのイメージが異なったのであり，各人の人生観，価値観，宗教観などによって異なったイメージが形成されたのである。アメリカの自然は見方によって，田園を構成する要素をもっていたが，同時に人の心を不安にする要素をも有していたのである。

次に，荒野イメージと田園イメージの例をそれぞれ一つずつみてみたい。

ウィリアム・ブラッドフォード（William Bradford）はピルグリム・ファーザーズたちが見出したアメリカを，次のように描いている。

「彼らの目に入るものは野獣と蛮人の住むおそろしい，わびしい荒野だけであったし，その野獣や蛮人がどれほど多いのか彼らには分らなかった。また彼らは，いわばピスガの山頂に登り，この荒野から，彼らの希望を託すべきもっともよい土地を眺望することもできなかった。どちらに目を向けても，（天は別として）目にうつるものの姿は心を慰めてもくれなければ，満足も与えてくれなかったからだ。」[4]

しかし移住前に彼らが期待したアメリカは，このような「わびしい」場所ではなかったのである。

「そこは地味がゆたかで住むにふさわしく，文明人は誰も住んでおらず，野蛮で愚鈍な人間が出没するだけで，そのほかは野獣もほとんどいない。」[5]

アラン・ハイマートは，ピューリタンの荒野についての観念は「メイフラワー号やアーベラ号とともにアメリカにもたらされたものではなく，荒野自体から出たものである」と書いている。[6] つまりアメリカの自然それ自体には何ら価値はなかったが，それを開拓し居住可能な場所へと変化させる過程にこそ意義があった，というのである。

---

3) John Locke, "An Essay Concerning the True Original, Extent and Evil of Civil Government", in Edwin A. Burtt, (ed.), *The English Philosophers* (New York, 1939), p. 422.

4) William Bradford, *Of Plymouth Plantation* (1651). Edited by Samuel Eliot Morison (New York, 1952). 訳文は斎藤光訳「アメリカ到着」（ケネス・S・リン編　大橋健三郎監訳『アメリカの社会』東京大学出版会　1966年）29ページによる。

5) 訳文は日高明三訳「プリマス植民地の歴史」（アメリカ学会訳編『原典アメリカ史』第1巻　岩波書店　昭和25年）97ページによる。

6) Alan Heimert, "Puritanism, the Wilderness, and the Frontier," *New England Quarterly*, Vol. 26, No. 3 (September 1953), p. 361.

なお Roderick Nash, *Wilderness and the American Mind* (New Haven, 1967) は，植民当初から20世紀の今日までのアメリカ人の「荒野」観をテーマにしたものであり，「荒野」をすべて

自然の力を征服し，孤独感を克服し，「丘の上の町」をうち立てることがピューリタンの使命であった。少なくとも彼らはそう感じていたのである。ここにいう自然とは，実際に見ることができる事物・現象のみならず，堕落した，神の教えを見失なった人間性 (human nature) をも含んでいたことは今さら指摘するまでもないであろう。[7] したがって「荒野への使命」(“Errand into the Wilderness”) という場合，ペリー・ミラーが指摘しているように，「荒野」よりも「使命」が強調されたのである。[8] ニューイングランドに移住したピューリタンに関していえば，「荒野」のイメージはむしろ自然征服のメタファーとして，移住者に使命観を呼び起し，アグレッシヴで規律ある人間を養成するうえに有効な役割を果したのである。

他方，ヴァージニアの植民地人の間には異なったアメリカ自然観が支配的であった。たとえばロバート・ベヴァリー (Robert Beverley) の描くヴァージニアの自然は，あたかもアメリカが田園であるかのような印象を与える。

「……（ヴァージニアは）気候が非常によいうえに果実が美味しいので，人びとは多くの誘惑にかられる。澄み切った明るい空は，彼らに新しい活力を吹きこみ，ゆううつな陰気な考えをすべて取り除いてくれる。人びとは皆，暖かい太陽の恩恵を享受している。……数限りない自然の快楽は彼らの感覚を楽しませる。まだ人間の手の入っていない自然の美しさに彼らは目を奪われ，せせらぎの絶え間ないつぶやき，風が木々の間を気ままに飛びかいながら奏でる通奏低音のセレナードは，彼らの耳に音楽を与える。鳥もまた楽しげに，この田園の合奏に，彼らの心持よい調べをもって仲間入りをする。社交をこよなく愛するモノマネドリは人の姿を見かけるたびに近くの小枝にとまり，この世でもっとも美しい自然のアリアを歌う。」[9]

ベヴァリーによれば，ヴァージニアはカナンの地，ペルシア，インドの大部分，支那，日本とほぼ同じ緯度にあり，「世界の庭」の一部なのであった。[10]

ニューイングランドでは上述のブラッドフォードのほかに，エドワード・ジョンソン (Edward Johnson) やジョン・ウインスロップ (John Winthrop) 等がピューリタンの植民の歴史を克明に記し，彼らがいかに「使命」に忠実だったかを後世に残すことに努めた。[11] しかしヴァージニアに関しては，植民当初キャプテン・ジョン・スミス (Captain John Smith) が記した一般史以来何もなく，わずかに18世紀の初めに，前述したベヴァリーの著作が最初の歴史書として現われたにすぎない。[12] ベヴァリーは，ヴァージニア人は彼らの自然環境に満足し，「技術や労働によってそれをさらに改善しようとしないで，まったく自然の寛大さに依存している。……彼らは自然の果実を集めることさえ苦痛に感じているほどである」と，彼らの怠惰を批判しているのであるが，これはヴァ

征服するまでアメリカ人はそれに対して常にアグレッシヴな態度をとり続けたとしている。すなわち自然開発と自然保護は相対立する利害関係であるが，前者がつねに後者を圧倒してきたというのである。

7) Nash, *op. cit.*, p. 3.

8) Perry Miller, *Errand into the Wilderness* (Cambridge, Mass., 1964), pp. 1～15.

9) Robert Beverley, *The History and Present State of Virginia* (1705). テキストは Louis S. Wright 編注のものがある。(Chapel Hill, 1947) 以後出典を示すページはこのテキスト (*History* と略す) によるものとする。
History, p. 298.

10) *Ibid.*, pp. 296～7.

11) John Winthrop, *Winthrop's Journal*: “History of New England, 1630～1649”; Edward Johnson, *Wonder-working Providence, 1628～1651.*

12) Captain John Smith, *The General History of Virginia, New England, and the Summer Isles* (1624).

ージニアに定住したものが——すべてとはいわないまでもかなり多くのものが——そこに彼らが求めていたものを発見し，いわゆる理想郷の追求をそこで中止してしまったことを示していると考えられないだろうか。同じアメリカの自然が，たとえそれが厳密にはマサチューセッツとヴァージニアという地理的相違はあるとしても，荒野イメージと田園イメージの互いに矛盾する二つのイメージを生むようになったのが，移住の動機などの主観的条件のちがいによるものであることを，ブラッドフォードとベヴァリーの例は示すものではなかろうか。

2．「自然の神」(“Nature's God”) とアメリカ

〔「自然の神」の概念〕

ジェファソンがアメリカの自然について記述を始めた時，アメリカは純粋に荒野的でもなければ田園的でもなかった。未開の辺境は次第に西方に後退し，荒野から離れて住む人間が増えていったからである。また製造業・商業も起るようになり，牧歌的田園のイメージを維持することはますます困難になった。このような自然環境そのものの変化と並んで，時代の風潮あるいはアメリカを取りまく政治的状況も変化しつつあった。ジェファソンのアメリカ自然観がこれらの要因によってどのように影響されたかを，次にみてみたい。

「信仰の時代」といわれる17世紀と「ロマン主義の時代」といわれる19世紀にはさまれた18世紀は，しばしば「理性の時代」，「啓蒙思想の時代」と呼ばれることがある。この時代の歴史を理解するためにはまず啓蒙思想の意味を明らかにすることが肝要であろう。

啓蒙思想をひと言でいい表わすことはむずかしい。なぜならそれは一定の主義主張に基づいたものでもなければ，統一的な思想体系を有していたわけではないからである。ピーター・ゲイによれば，それは (1) 人間の「思考様式」(man's style of thinking) における一大変化であり，また (2) 一つの「気分」(temper) でもあった。思想的にはそれは合理主義，機械的・調和的宇宙観，均衡的社会観によって特徴ずけられる。しかし一つの「気分」として，それは現実的でありながら希望（楽観）的でもあり，科学的でありながらヒューマニスティックだったのである，と。[13] またカール・ベッカーは「人間の自然に対する関係，および両者の神に対する関係は，人間のもっとも根本的な問題である」といっているが，18世紀においてはこれらの関係に根本的な変化があった。[14] このことをよく表わしているのは，ジェファソン自身の手によるアメリカ独立宣言の次の一句であろう。

> 「自然の法や自然の神の法によって本来当然に与えられるべき独立平等の地位」(“the separate and equal station, to which the laws of nature and of nature's God entitle”)

人間（国民）の状態は，ジェファソンのこの言葉によれば，自然の法によって決定されるのであり，神の法によってではない。王権神授説などは当然否定されるべき性質のものなのである。また自然と神の関係についていえば，神は自然の神であって，自然が神の自然なのではない。啓蒙思想は神の存在を否定してはいないが，神はもはやパーソナルな「父なる神」(God the Father) ではなく，「偉大な技師」(the Great Mechanic) などの名で呼ばれるインパーソナルな存在になってしまっている。神は宇宙の創造主ではあるが，創造の仕事が終ってからはその運行に二度と介入することはしない。

---

13) Peter Gay, “The Enlightenment”, in C. Vann Woodward, (ed.), *A Comparative Approach to American History* (New York, 1968), pp. 37, 47.

14) Carl L. Becker, *The Heavenly City of the Eighteenth-Century Philosophers* (New Haven, 1932), pp. 61～2.

18世紀には，神は人間に対して思いやりがあるから自然を恵みあるように作られた，という考えは成立しなかった。逆に，自然が恵みあるからには神もそうであるにちがいない，という考えが支配的になった。いわば自然と神の位置が逆転したのである。

自然は聖書に記述されている神の言葉にかわって，創造のデザインを伝えるものとされた。いわゆる「第二の啓示」と考えられたのである。したがって啓蒙思想においては，自然の観察は創造のデザインを理解するためには必要不可欠な条件であった。自然の観察から得られた——主観的でなく——客観的事実は，あらゆる思想・制度の基準として重要な役割を果すこととなった。

自然を観察するものにとって客観的事実の追究は第一の条件であったが，それは観察者をして創造の妙なることを賞賛するのを妨げるものではなかった。主観的反応の余地は残されていたのである。つまりニュートン物理学の普及に大きな貢献のあったコリン・マクローリン（Colin Maclaurin）のいうように，

「自然の現象を叙述し，その原因を究明し……宇宙の全体的構成を探究することが自然哲学の課題である。……われわれは神の仕業を通して神を知ることに努めるべきである。

（中略）

われわれの自然についての知識は，たとえそれがいかに不完全なものであろうと，もっとも理解しうる方法で，全宇宙を支配するあの巨大な力をわれわれに知らしめすのに役立つものである。……このようにすぐれたシステムについて考えそれを賞賛する哲学者は彼自身，感情の高まりを覚え（excited），自然の全体的調和に相応したものとなるよう気持が鼓舞される（animated）のを禁じえない。」[15]（傍点—筆者）

したがって自然哲学者が客観的でありながら同時にエモーショナルでもありうるのは，啓蒙思想が一つの「気分」であることを考えた場合，必ずしも矛盾するものではないのである。[16]

〔ジェファソンのヴァージニア〕

『ヴァージニアについての覚え書』は，ジェファソンがフランス政府の要請に基づいて書いた，23の質問とそれに対する返答からなる彼の唯一の主な著作である。18世紀のヴァージニアの実情——人口，法律，宗教，工業，農業等——を詳細に記述したものであり，またジェファソンの政治思想を簡潔に表わしたものとして高く評価されている。とくに，「質問19　製造業および通商について」の中の次の一節——「もし神がかりに選民なるものをもつものとすれば，大地で働くものこそ神の選民である」——には，彼の農本主義の思想が要約されているとされている。

しかし，この『覚え書』の中にわれわれは，おそらく，これまでアメリカの自然について書かれたもっとも美しい描写を見出すことができる。ジェファソンのアメリカ自然観についての考察をこの『覚え書』から始めようとするのも，そのためなのである。

(1)　自然の観察

『覚え書』は，ヴァージニアの位置を示すなんの飾りけもない一節で始まっている。

「ヴァージニアは東は大西洋と境を接し，北は東海岸のワトキンス・ポイントを通りポトマック河口のセンクアクと結ぶ北緯37度57分の線，メリーランドとの境をなすポトマック河を北の支流の最初の泉までさかのぼり，そ

15) Colin Maclaurin, *An Account of Sir Isaac Newton's Philosophical Discoveries* (1775), pp. 3, 4, 95; Quoted in *Ibid.*, pp. 62～3.

16) 同じ自然から知識を得るといっても啓蒙思想にいう自然が，James F. Cooper の *Deerslayer*(1841) の中でナッティ・バンポーがいう「自然の本」(“book of nature”) と異なるのは明らかである。彼はいう——「この本は私は読むことができるし，知恵と知識で満ち満ちているのを知っていま

の泉を通る経線を北緯39度43分42.4秒までたどり——東西に走るこの緯線はメリーランドとペンシルヴァニアを分ける境界線になっており，メイソンおよびディクソンによって測量されたものである——交った点から西方に，ペンシルヴァニアの東の境界線から経度で5度西にあたる点まで進み，さらにそこから経線を北にたどり，オハイオ河と交る線によって囲まれている。西は，オハイオ河とミシシッピー河によって囲まれ——ただし北緯36度30分まで——，南は北緯36度30分の線で境されている。」[17]

ジェファソンは，これらの境界線に囲まれたヴァージニアの面積を，「経度1度が55マイル3,144フィート……緯度1度を69マイル869フィートと仮定して」，121,525平方マイルと計算している。そのうちアリゲニー山脈より西の地域の面積は79,658平方マイルとしているが，いずれも今日ではケンタッキー州およびウエストヴァージニア州となっている地域を含めた数字である。

ジェファソンの観察が詳細なことは，ヴァージニアの気候についての彼の記述からもうかがわれる。1772年から1777年までの気象観測をもとにして，彼はウィリアムズバーグおよびその近郊の天気，各月ならびに各年の平均雨量，最高・最低温度，風向きの統計をとり，次のような結論に達した。47インチの年平均雨量はヨーロッパより多いかもしれないが，「ヨーロッパ中部と比較して曇の日は半分」なので，日射時間は逆にヴァージニアのほうが多いのではないか。それならばアメリカはヨーロッパより気候が寒冷で湿度が高いという，当時ヨーロッパで支配的であった理論は必ずしも立証できない，と。[18]

しかしヴァージニアの地理や気候についての精緻な観察以上に興味があるのは，『覚え書』の中の質問の配列である。ジェファソンは彼に寄せられた質問を配列し直し，次のように並びかえた。

質問1　ヴァージニアの境界線について
質問2　河川について
質問3　海港について
質問4　山について
質問5　滝および鐘乳洞について
質問6　地下資源および動植物について
質問7　気候について
質問8　人口について
質問9　軍隊（正規軍および市民軍）について
質問10　海軍について
質問11　アメリカ・インディアンについて
質問12　郡および町の組織について
質問13　邦憲法について
質問14　法の施行について
質問15　大学およびその他の公共建造物について
質問16　王党派の財産に対する処置について
質問17　宗教について
質問18　特殊な風習（奴隷制など）について
質問19　製造業および通商について

す。」(Ch. 24) この場合，人間の本能あるいは本能的要素が強調されているのであり，学問的知識の探究は重要視されていない。むしろ障害とさえされているのである。

またエマソンのいう神秘的自然ではないことも明らかである。彼はこのようにいう。「(この裸の地に立つと) 私は透明な眼球になる。私は無である。私はあらゆる物をみることができる。普遍的存在 (Universal Being) の流れが私の体内をめぐる。私は神の重要な部分である。」("Nature", *Complete Works*, Century ed. (1904), I, pp. 15～6) エマソンのいう自然とは感覚で理解するものであり，理性で学ぶものではないとされる。

17) Thomas Jefferson, *Notes on the State of Virginia*. Edited by William Peden (Chapel Hill, 1955), p. 3.『ヴァージニアについての覚え書』に関しては，特記しないかぎり，以後出典ページはこのテキスト (*Notes* と略す) によるものとする。

18) *Notes*, "Query VII", pp. 73～5.

質問20　交易品について
質問21　度量衡および貨幣制度について
質問22　財政（歳入および歳出）について
質問23　植民地であったころのヴァージニアに関する歴史書，陳情書，公文書等について

ジェファソンがこのように配列し直した理由は何であろうか。彼がアトランダムに並べたとは，むろん考えられない。

質問の配列をみれば，『覚え書』が単純な事実の記述から始まり，抽象的な事項の考察に移行しているのは明らかである。緯度線，経度線，自然の河川を用いて表わした境界線の記述や，気候についての統計は単純ではあるが，誰でも理解できる客観的事実でもある。啓蒙思想が自然の観察を重要視したのは，その運行を正しく知ることによって万物の調和的・均衡的関係を学ぶためであったとは前述した通りである。ジェファソンがアメリカ（ヴァージニア）についての客観的事実を明確にすることにまず心がけたことは，当時のこのような思想的背景とは無関係ではなかった。

彼の方法はまた，ロックの心理学（経験論）における認識の順序を想起させるものでもある。ロックはなんの知識をもたない人間の心は「空白な書板」(tabula rasa) のようなものであり，感覚（経験）によって初めて知識を習得することができるとする。ジェファソンによるヴァージニアの記述において，地理学上のおよび気象学上の事実が，認識の第一歩である感覚（経験）に相当すると考えることはできないであろうか。アメリカ（ヴァージニア）についてなにも知らないフランス人はそのような経験——実際は客観的事実——を通して，初めて知識を得ることができるのである。ヴァージニアの法律，憲法，行政組織などは，ヴァージニアについての初歩的知識を集積して初めて理解できるのである。

(2)　自然の賛美

ジェファソンは『覚え書』の中で少なくとも2ケ所において，ヴァージニアの自然をエモーショナルな表現で描写している。そこでは彼は客観的事実の追求から離れて，彼の主観的反応を優先させているかのようである。先に引用したマクローリンの言葉を使えば，彼は自然の造形の妙なることに「感情の高まりを覚え」，「気持が鼓舞される」のを禁じえなかったのである。

一つは，ハワード・M・ジョーンズが「審美的原則によって構成され十分にパノラマ的」と呼んだ，ポトマック河とシェナンドー河の合流点についてのジェファソンの描写である。[19]

「ポトマック河がブルーリッジ山脈をぬけるところは，自然のもっとも雄大な光景の一つであろう。[20]非常に高い地点からみると右手には，屈曲点を求めて山麓を100マイルも流れてきたシェナンドー河がせまってくるのがみえる。左手には，やはり山をぬける地点を求めてポトマック河が近ずくのがみえる。出会った瞬間，二つの河はともに山に激突し，それを引き裂き，そして海に向かって流れていく。この光景を初めてみる時，われわれは地球は時間をかけて造られたのだ，まず山が，続いて河が造られたのだ，ブルーリッジ山脈が二つの河をせきとめ，せきとめられた河は湖となって峡谷全体に広がった，水面が高まった結果この場所で水があふれ出し，山をその頂きから麓まで断ち切ったのだ，という印象をすぐにも受けるのである。河の岸にうず高くつまれた岩石は——これはとくにシェナンドー河のほうによりいちじるしいのであるが——それらが自然のもっとも巨大な力によって岩床から切り離され，位置を変えら

19) Howard Mumford Jones, *O Strange New World; American Culture: The Formative Years* (New York, 1964), p. 358.

20) 二つの河は，現在はウエストヴァージニア州に属しているハーパーズ・フェリー (Harpers Ferry) で合流している。

れた跡を示し，われわれの印象の正しさを証明するかのようである。」

ここでジェファソンの文章は，突然その調子を変える。

「しかし，自然がこの地点からの眺望にほどこした最後の仕上げはまったく対照的である。近景が荒々しく人の想像を越えた迫力をもっているのに対し，遠景は穏やかでさわやかである。切り裂かれた山のその切れ目から，無限の彼方に，真直な青い地平線がわずかにのぞいている。平野である。あたかもそれは〔近景の〕混乱や騒動を離れて，山の裂け目を通って眼下の静けさに加わらないか，と呼びかけているかのようである。」[21)]

ジェファソの地質学の知識が正しいかどうかを議論する以要はないであろう。また，彼の距離感——たとえば「無限の彼方」という表現——をきびしく批判する必要もないであろう。むしろ「大西洋を渡ってみにくる価値がある」と彼が主張する光景を，彼自身いかに描写しようとしているかを理解することが肝要であり，このように魅力あるイメージを描いた彼の文学的才能を認めるべきであろう。

ジェファソンがヴァージニアの自然を賛美しているもう一つの例は，彼によれば「自然の仕業の中でもっとも荘厳な（“sublime”）」ナチュラル・ブリッジ（the Natural Bridge）である。これはヴァージニアの西部にある石灰岩でできた天然の橋である。

彼はまずブリッジを正確に描写することから始める。

「ブリッジのあたりでは山の亀裂の深さは，ある人の測量によれば270フィートであるが，別の人の測量によれば205フィートしかない。その幅は最上部で90フィート，最下部で45フィートである。……ブリッジの幅は中央では60フィートであるが，両端ではさらに広い。そのアーチの頂点でブリッジは約40フィートの厚さがある。……アーチは半楕円形に近い。しかし楕円の長軸——これはアーチの底辺である——は，アーチの高さを表わす半軸よりも数倍長い。」

ポトマック河とシェナンドー河の交流点の描写の場合と同様に，ジェファソンの文章は，突然その調子をかえる。

「荘厳な光景に接した時に湧き起る感情が，このナチュラル・ブリッジを見る時ほど高まることは決してないであろう。崇高で，軽やかで，あたかも天にとどくかのようにそびえるこのアーチは，なんと美しいアーチであろうか。それを見るものの歓喜（“rapture of the Spectator”）は，まったく言葉ではいい表わせない。」[22)]

いわば予期しなかったような興奮の言葉が冷静で客観的な記述に続くのであるか，そのトランジッションはまことに効果的であるといわざるをえない。ジェファソンは，ナチュラル・ブリッジは「質問5　滝および鐘乳洞について」の範囲に入らないかもしれないが，といって無視できるものでもないと弁解するのである。しかし彼のペンが生み出した美しい描写を考慮するならば，このような弁解もほとんど必要はなかったといえよう。[23)]

〔アメリカの自然環境——博物学的論争〕

『覚え書』の「質問6」は，表面的には，アメリカ（ヴァージニア）の地下資源および動植物の記述にむけられたものである。しかしわれわれはその中に一種の博物学的論争をみるものでもある。

---

21) *Notes*, pp. 19～20.

22) *Ibid.*, pp. 24～5.

23) 「荘厳な」または「荘厳さ」（sublime または

当時ヨーロッパでは，一部の知識人の間にアメリカの動物や植物はヨーロッパのそれよりも劣っている，それは気候が動植物の生長に適さないからである，という考え方が支配的であった。[24]たとえばコーネリアス・ド・ポー(Cornelius De Pauw)，ヴォルテール (Voltaire)，ビュッフォン (Buffon)，レイナル (Abbé Raynal) 等である。[25]彼らの理論——便宜上アメリカ退化説と呼ぶ——がどこに由来するかをせんさくすることは，本稿の範囲外なので詳しく触れることはできない。しかしモンテスキュー(Montesquieu) 等の唱えた環境説——「人間の精神と感情は気候によって異なる」[26]——や，「新」世界はそのヨーロッパ人による発見が比較的に新しいだけでなく，地質学的にいっても「新」大陸であるといういわばセマンティック上の混同，あるいはアメリカから帰った旅行者の報告などがその形成に影響を及ぼした，と今日では一般に説明されている。[27]

アメリカ退化説は，アメリカの動植物がヨーロッパのそれより劣っているという以上の意味があった。問題は，単にアメリカの気候が動植物の生長に適しているかどうかの議論以上に，根本的な事柄に関係していたからである。すなわちもしアメリカの気候が動植物の生長に不適であり，そこに住む動物や植物が劣っているならば，原住民（インディアン）にしろヨーロッパからの移住者であるかを問わず，そこに居住する人間も何らかの意味においてヨーロッパ人よりも劣っているのではないか，という議論も成り立ちうるからである。もしこれが事実ならば，アメリカの存在意義そのものが問われるからである。なぜならもしアメリカに移住したものがアメリカの気候の影響を受け，肉体的に，道徳的に，文化的に移住以前より劣るようになるならば，アメリカにユートピアを見出しそこに理想的な生活を建設するというすべての企てが，まったく意味を失うからである。

しかしアメリカ退化説は，アメリカ革命期に，アメリカが共和主義の理想——信仰の自由，政治的自由，平等の概念など——と同一視されるようになってからは衰退する。またルソー (Rousseau) のように，財産制や政府の束縛

---

sublimity) の概念は18世紀になって一般的に受け入れられるようになった。「荘厳さ」の対象となるような光景は何らかの意味で見るものの感情を湧き立たせるものであり，また一種の畏敬の念を起こすものでもある。その定義によれば，「荘厳さ」という概念は18世紀的宇宙観——調和のとれた，秩序ある宇宙という観念——と矛盾するものであるが，アメリカに関していえば，それらは補完的関係にあった。つまり調和的宇宙観は進歩 (progress) を意味し，未開の地が開拓されることに通じる。しかしアメリカは，いまだにその自然がそこなわれていない，「エデンの園」のような存在であるというイメージは失ってはならないとされ，アメリカの自然を「荘厳」という言葉で描写することによって，文明化されたヨーロッパと対比させる必要があったのである。(*Sanford, op. cit.* p. 142.)

Edmund Burke, *Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime* (1757) がアメリカにおける「荘厳さ」の概念の形成にとくに影響があったとされている。(Nash. *op. cit.*, p. 45.)

この意味においてジェファソンの感情の高まりは，18世紀よりも19世紀のセンチメントに近かったといえよう。

24) この問題については Durand Echeverria, *Mirage in the West: A History of the French Image of American Society to 1815* (Princeton, N. J., 1968), pp. 3〜38 によるところが大きい。

25) Cornelius de Pauw, *Recherches philosophiques sur les Américains* (1768); Voltaire, *Essai sur les moeurs* (1753〜56); Buffon, *Histoire naturelle* (1749〜67); Abbé Raynal, *Histoire philosophique et politique des establissements et du commerce des Europeens dans les deux Indes* (1772).

26) *Esprit des lois* (1748); Quoted by Echeverria, *op., cit.* p. 4.

27) スウェーデンの植物学者ピーター・カーム (Peter Kalm) の旅行記 *Travells into North America* (1770〜1, 3 vols.) は，ヨーロッパで広く読まれた。

を受けない，いまだに純真無垢なアメリカ・インディアンの生活の中に失われた人間の幸福を再び発見できるとして，アメリカの自然を強力に弁護するものも現われたことも，その衰退をうながした一因であったとも考えられる。（しかしアメリカは文化的にヨーロッパより劣るという考え方は，その後もヨーロッパ人の間でかなり根強く残った。）

(1) アメリカにおけるマンモス棲息の事実

ジェファソンの『覚え書』は，アメリカ人によるアメリカ退化説への反ばくの一例としても興味深い問題を含んでいる。

アメリカ退化説の主唱者の一人であるビュッフォンは――ジェファソンの要約によれば――次のような意見を，アメリカの動物に関してもっていた。すなわち (1)ヨーロッパとアメリカに共通の動物についていえば，アメリカの動物のほうが小さい (2)アメリカにのみ棲息する動物についていえば，体はあまり大きくない (3)ヨーロッパとアメリカに共通の家畜についていえば，アメリカのものはヨーロッパのものより退化している (4)動物の種類はヨーロッパのほうがアメリカよりも多い。ビュッフォンの結論は，暑ければ生長が早く寒ければ遅い，また湿気が少なければ生長が早く多ければ遅い，という前提に基づいているのである。[28]

ジェファソンはヴァージニアの気象観測の結果から，アメリカの気候がヨーロッパのそれより寒冷で湿気が多いとは考えていなかったし，湿気と動物の生長について決定的な関係があるとは確信していなかった。かりにビュッフォンの前提が正しいと仮定しても，ジェファソンは自ら作成した三種類の統計表―― (1)ヨーロッパとアメリカに共通した動物（四足動物）の大きさを比較したもの (2)ヨーロッパおよびアメリカに固有の動物の大きさを示したもの (3)両大陸に共通した家畜の大きさを比較したもの――により，ビュッフォンはいずれの点においても「誤っている」と反ばくしている。[29]

しかし，アメリカにもマンモスが棲息していたらしい根跡があるという事実は，なによりも決定的な証拠である。

アメリカの奥地――正確にはテネシー河の一支流の河岸，北緯36度30分の地点付近――で，マンモスのものと目される大きな動物の骨と臼歯が「同じ場所で」発見された。ヨーロッパの博物学者には，それはかばの骨と象の臼歯であってマンモスのものではないと解釈するものも少なくなかった。しかしジェファソンは別の見方をした。象とかばが北緯36度30分まで北上することはないことなどを考えると，彼にはその骨と臼歯がマンモスのものとしか思えなかったのである。もしそれがマンモスのものならば，ヨーロッパと同じようにアメリカにも最大の陸上動物が棲息していたことが証明されはしないか。マンモスのものでないとしても，それと同じくらいの大きさの動物が棲息していたことを示すものではなかろうか，とジェファソンは反問する。アメリカ退化説の主要な部分は，かくてその根拠を失うのである。[30]

(2) アメリカ・インディアンについて

ヨーロッパでは，アメリカの原住民（インディアン）について，彼らは生命力が弱いので寿命が短い，生殖機能の発達が遅れているので子供がたくさん産めない，怠惰である，耐久力に欠け勇気がない，理性，道徳性に欠如している，という考えがかなり強かった。ビュッフォンもこのような考えをもつ一人であった。ジェファソンはこの点に関しても，この著名な博物学者の理論を鋭く批判するのであった。

彼はこう書いている。

「インディアンはある事の成否が彼の勇気にかかっている時は，勇敢にたたかう。……彼は多数の敵に立ち向かっていく。たとえそれ

28) *Notes*, p. 47.

29) *Ibid.*, pp. 50～2, 58.

30) *Ibid.*, pp. 44～7.

が自分に好意的であるはずの白人であっても，彼はたたかいの相手に降伏するよりは勇ましく戦かって死ぬことを選ぶ。……われわれの間で知られている宗教的熱狂すらも及ばないような意志の堅固さでもって，彼は苦しみに耐えようとする。……他人に対する彼の思いやりは深く，極端といえるほど忠実である。ふつうは人間の運命を超越しているかのように振舞う（インディアンの）勇士たちも子供を失った時ははげしく泣く。彼らの感情はそれほどこまやかなのである。」[31]

インディアンの女は子供を多く産めないという説に対してジェファソンは，それは生物学的理由によるよりもむしろ社会学的理由——はげしい労働，移動のひんぱんな部族生活など——によるものであろうとし，白人と結婚したインディアンの女が多数の子供を産んだ例をいくつかあげている。

またインディアンが理性や道徳性に欠けているという理論に対しては，そのことを証明するのに十分な資料はない，と反論する。彼によれば，アメリカ・インディアンの文化的劣性についてのビュッフォンの議論は，「正当な論理よりも雄弁」が先じているのであり，彼は「創造力をたくましくし，言葉のあやを使い」，科学の名のもとに平気で誤りを犯しているのである。ジェファソンのビュッフォン批判は，後者のアメリカの自然についての結論のみならず，科学的態度そのものに触れるものであった。

(3) アメリカ人の知的・文化的水準について

アメリカ退化説は，最後に，アメリカに住むものは知的にも文化的にもヨーロッパ人より劣っている，という点にまで拡大される。アメリカに住むものはヨーロッパからの移民およびその子孫であるので，これは，アメリカに移住すればヨーロッパ人はそこの自然環境を受けて，知的および文化的に退歩するということを意味した。

レイナルは，アメリカの文化的退歩を唱えた一人であった。「アメリカがいまだに卓越した詩人も，すぐれた数学者も，芸術・科学の分野においても才能ある人も輩出していないことは，まことに驚くべきことである」と，彼はいう。これに対してジェファソンは次のように反ばくする。

「（国としての）アメリカの存在が，ギリシャがホメロスを，ローマがヴェルギリウスを，フランスがラシーヌやヴォルテールを，イギリスがシェークスピアやミルトンを生み出した時ほど長くなった後でも，このような非難があてはまるならば（私はなにもいわない）。」[32]

ジェファソンはワシントン，フランクリン，リッテンハウス等の名をあげ，戦術，物理学，天文学の各分野で一流の人物をアメリカはすでに生んでいるといっている。「政治学，雄弁術，絵画，彫刻の各分野で……アメリカは才能のある人を輩出する確実な証拠がある。」彼にしてみれば，アメリカは文明の進歩に貢献するような人物を，その課せられた数は十分に送り出しているといいたかったのであろう。

天才が現われるには時間がかかる，というのはジェファソンの持論である。すでに彼は他の個所で，アメリカ・インディアンは現在は文化的に劣っているかもしれないが将来もそうあるとはかぎらないことを，紀元前1世紀のヨーロッパの例をあげて強調している。ローマがヨーロッパを征服したころ，「アルプスの北には……卓越した詩人，すぐれた数学者，芸術・科学の分野における偉大な発明家といえる人がいたであろうか」と，彼は反問する。[33]ニュートンが出るまで約17世紀かかったのであるが，アメリカを紀元前1世紀のヨーロッパにたとえるな

31) *Ibid*,. pp. 59～60.

32) *Ibid*., pp. 64～5.

33) *Ibid*., p. 63.

らば，10世紀の後にはアメリカにも，ニュートンと比較されるような偉大な数学者が現れるにちがいない，という意味が彼の言葉には含まれているのである。（しかしジェファソンがアメリカの現状からして，偉人が輩出するのにそれほど長い時間はかかるとは思っていないことも，また明らかである。）

3．「大地で働くもの」（"Those Who Labor in the Earth"）のアメリカ

以上みてきたようにジェファソンは，アメリカは決して知的・文化的にヨーロッパより劣るものではない——少なくとも，アプリオリにそう想定する根拠はない——と論じた。彼は次のような言葉で結んでいる。「（イギリスの）自由は大西洋を越えた」と。その少し前に彼は，「ワシントンは，自由がその信奉者をもち続けるかぎり人びとの記憶に残るであろうし，彼の名は永遠に忘れ去られることはないであろう」ともいっている。[34] これは，ヴァージニアの地下資源および動植物についての叙述とはまったく関係がないような結論でもある。しかし実際には，ジェファソンの思想——それはまた当時多くのアメリカ人の思想でもあったのであるが——の中では，アメリカの自然とアメリカの将来の発展は密接な関係があったのである。つまり恵まれたアメリカの自然環境は，その将来の発展を約束し，アメリカの政治的，道徳的強さを示すものだったのである。同じ自然の観察から出発して，ジェファソンはヨーロッパのアメリカ退化説とはまったく逆の結論に達したのであった。

〔ジェファソンの農本主義——一つのレトリックとして——〕

『覚え書』の次の一節は，ジェファソンの農本主義（agrarianism）を表わす言葉としてしばしば引用される。

「それならばわが市民が皆土地の耕作にたずさわるのと，市民の半分が耕作から離れて他の半分のために製造業と手工業に従事するのと，いったいどちらが最善の策であろうか。もし神がかりに選民なるものをもつものとすれば，大地で働くものこそ神の選民であり，かれらの胸をば神は欠くことのできない貴重な徳性を収めておく場所とし給うのである。」[35]

この一節はアメリカの製造業および通商についてのジェファソンの回答の中にみられるのであるが，ここまではいわば導入部である。彼は，アメリカは製造業を起すことに専念するよりは商業を盛んにし，自国でとれる原料を輸出しその代りに上等な外国製品を輸入するのが望ましいことを，冷静に述べている。つまり経済的見地からして，アメリカの原料とヨーロッパの製品の交換は必然的である，と彼は考えるのである。いかなる国も自国に製造業を起すべきであるという理論は一見して正しく思われるが，状況の相違を考慮すれば必ずしもそうではないと彼はみる。たとえば，

「ヨーロッパでは，土地はすでに耕されているか，あるいは耕作者に閉ざされている。その結果，過剰人口を養っていくために，好むと好まざるとにかかわらず，必然的に製造業に頼らざるをえないのである。しかし，われわれは農民の勤勉を待つ広大無限の土地をも

34) *Ibid.*, p. 65.

35) 「質問19」（"Query XIX"）は短い。わずか2ページにも満たない。訳文は斎藤真訳「ジェファソン講演書簡集」（『世界の思想』第7巻——「アメリカの建国思想」　河出書房　昭和41年）148～50ページによった。

またジェファソンは1785年10月28日付のジェイムズ・マディソン（James Madison）への手紙の中で，「小規模な土地所有者こそ，国家にとって最もたいせつな部分なのです」とも書いている。ほぼ『覚え書』が書かれたのと同じころである。（同上153ページ。）

っているのだ。」

このあとに，先に引用した「もし神がかりに選民なるものを……」以下の文章が続くのであるが，この一節を境にしてジェファソンの論調が急に変化しているのは明らかである。客観的な事実の描写が，あたかも突然に，農業とそれに従事するものの賞賛へと移行するのであるが，このようなトランジッションの方法はすでに，いく度か『覚え書』の中にみられた。けだしレトリカルな手法というべきであろう。[36]

「大地を耕す人びとが道徳的に腐敗するなどということは，いかなる時代，いかなる国民といえどもその例をみないことである。……一般的にいうならば，どの国家においても，農民の人口数に対して農民以外の諸階級のものの総計が占める割合は，正しく国家の健全な分子に対する不健全な分子の割合を示すものであり，腐敗の度合をはかるよき物差しなのである。……大工，石工，鍛冶屋は農業にも必要である。しかし〔その他の〕製造業全般の仕事は，これをヨーロッパにおけるわれわれの工場でやらせればよい。……大西洋を横断して商品を運ぶ損失は，政治が恵まれ永続することによってつぐなわれよう。」

ジェファソンの質問――「それならばわが市民が皆土地の耕作にたずさわると，……どちらが最善の策であろうか」――は，レトリカルな質問である。彼は，すでに同じ手法を「質問11」で用いている。アメリカ・インディアンの間では法律の数は少なく制度も簡単であるが，それだからといって犯罪が多いとはかぎらない，むしろ非常に少ないと彼は指摘したのち，彼は次のようにいう。

「もし野蛮なアメリカ人の間におけるのと同様に法律がまったく存在しないのと，文明化したヨーロッパ人の間でのように法律が多すぎるのと，どちらが人を悪にしむける傾向があるかと問われるならば，両方の状態を知る人は，後者である，と答えるであろう。羊は狼の保護を受けるよりは，自分たちだけでいるほうが幸福に感じるものである。」[37]

ジェファソンは「もし……と問われるならば」と書いているが，彼が，決してこのような質問が発せられることはないと思っているのは明らかである。彼は，意識的にこのような質問のもつ効果を考えていた，といえるのではないだろうか。そこで，単に法律は単純であるよりも複雑であるほうが望ましいという代りに，単純な場合はどうなるか，複雑な場合はどうなるかというポシビリティーの選択の余地を，一応は読者に提供するのである。

と同様に，アメリカ人が皆土地の耕作にたずさわるというのが彼の理想なのであるが，彼は直接自分の意見を述べることはしないで，皆が土地の耕作にたずさわらないとすればどのような結果になるかを，しばし読者に考えさせるのである。いずれにしても，彼には「どちらが最善の策」であるかは明瞭なのである。彼はまた，「もし神がかりに選民なるものをもつものとすれば」と仮定的ないい方をしているが，このような表現も，自分の意見を強調するために彼が用いた意図的な手法であった。ジェファソンが「選民」とかパーソナルな神の概念を認めていなかったことは周知の通りである。アメリカの自由土地所有者はヨーロッパの製造家よりも道徳的にすぐれているということを強調するために，彼自身はありえないと思ってはいたが，他の人ならばよく理解できたであろう「神の選民」という表現を，意識的に使ったのである。

〔アメリカの自然の道徳的意味〕

「大地で働くもの」の胸は，神が「貴重な徳

36) この指摘はMarx, *op. cit.*, pp. 124 ffによる。

37) *Notes.*, "Query XI" p. 93.

性を特別に収めておく場所」であり，このような人が「道徳的に腐敗するなどということは，いかなる時代いかなる国民といえどもその例をみない」とジェファソンはいっているが，この文章はいくつか別の示唆をも含んでいるように思われる。もし「大地で働くもの」が道徳的——勤勉，誠実，簡素——であり，アメリカの人口の大多数がこのような人であるならば，アメリカは道徳的な国のはずである。また，もし農業が人の徳性を養い製造業はそれを腐敗させるとするならば，アメリカの住民の大部分は農業に従事していることを考えると，アメリカはヨーロッパよりも道徳的にすぐれていることになる。最後に，大地（自然）が人の徳性を培養するのではないかという意味が，ジェファソンの言葉に含まれているように考えられてならないのである。

ジェファソンにとって自由土地所有者と，農業と，アメリカの土地（自然）は密接な関係にあった。かくて彼の描く理想国家は，自由土地所有者を中心としたデモクラティックな国家であった。そこでは「生命，自由，そして幸福の追求」というアメリカ独立宣言の中に述べられた人間の基本的権利が認められ，また実際的意味をもつものとされた。このようなジェファソンの政治理念に対して，国民が皆農業に従事し，生活に必要な品物は通商を通して外国から輸入する，というのが彼の経済思想であった。そしてこのような彼の政治理念および経済思想の根源は，アメリカの自然はヨーロッパのそれとは異なるという思想であった。つまりジェファソンのアメリカ自然観が，彼の政治および経済思想の根拠となっていたのである。ジェファソンがアメリカは特別の使命をもって生まれた国であるという考えをしていたとすれば，このようなアメリカ観もまた，彼の自然観にその根源を求めることはできないであろうか。（むろん，アメリカの政治的，経済的発展がジェファソンの自然観に影響を及ぼしたかもしれないという，逆の関係の可能性も考慮しなければならない点ではあるが。）[38]

以上みてきたようなジェファソンのアメリカ自然観は，彼一人にかぎられたものではなかった。実際に，それは土地を所有し農業に従事するものにも，都市で商業に従事するものにも共通した考え方だった。つまりアメリカの土地（自然）に道徳的意味があるという考えは，当時のアメリカに支配的だったのである。ジェファソンは，いわば当時の風潮を代弁していたにすぎないのである。他に同じような例を二，三あげてみよう。

ベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin）はボストンに生まれ，生涯の大部分をフィラデルフィアや，ロンドンやパリなどの大都市で過し，都市の中産階級の精神を代表する人物であるかのように評価されているが，アメリカについて語る時，彼がしばしば農本主義の用語を使っているのはあまり知られていない。たとえば移民勧誘のために書いたパンフレットの中で，彼は次のように記述している。

「（アメリカでは）ヨーロッパの貧民ほどの

38）ジェファソンは，アメリカは道徳的にヨーロッパよりすぐれていると強く確信していたので，アメリカの青年がヨーロッパに留学することすら危険であると感じていた。J・バニスター・ジュニア（J. Banister, Jr.）への手紙は，このことを示している。

「1785年10月15日。パリ発。……しかしなぜ教育のためにアメリカの青年をヨーロッパに送ったりするのでしょうか。……彼はヨーロッパのぜいたくと散財の風を好むようになり，彼自身の国の質素さを軽べつするようになるでありましょう。彼はヨーロッパの貴族主義者たちのもつ特権に魅惑され，彼の国で貧者が富者とともに享受している，あのすばらしい平等（の権利）を何か恐ろしいもののように見るようになるでありましょう。……アメリカ人は教育のためにヨーロッパにやって来るが，かえって知識や，健康や，習慣や，幸福を失っているように私には思えるのです。」（Adrienne Koch and William Peden (eds.), *The Life and Selected Writings of Thomas Jefferson* (New York, 1944), pp. 386～7）

惨めな人びともいないし，ヨーロッパで富豪と呼ばれるような人びともごくまれで，むしろ全般の幸福な中産状態（“happy mediocrity”）が広がっている。大地主もほとんどいないし，小作人もほとんどいない。たいていの人びとは自分の所有地を耕作するか，何かの工業や商業に従事している。……（中略）

この国では土地は安いが，その理由は広大な原野にはまだ住民が住みついておらずこれからさきも住みつく見込みもないからである。……だからヨーロッパとほとんど変らない穀物農業や牧畜を会得している誠実な若い働き者なら，たやすくそこで身をたてることができる。」[39]

また彼は，アメリカは「空気が清浄で，気候が健康によく，うまい食物がたくさんあって，土地を耕作することによる生計が確実なので早婚が助長されるなどの理由から」，人口増加が急速であるともいっている。

他の機会に彼はアメリカの理想的な姿を，牧歌的用語で次のようにもいっている。

「食糧が豊富で廉価で手に入るうえに……もし製造業が盛んになれば……（アメリカ人は）アーケイディアの羊使いたち（the Shepherds of Arcadia）のように幸福になるであろう。[40]〔傍点—筆者〕」

フランクリンのこの文章が，アメリカに製造業を起すことを奨励した書簡に見出されるのは大変興味深い。

ミシェル＝ギョーム・ジャン・ド・クレーヴクール（Michel-Guillaume Jean de Crévecoeur）の『アメリカの農夫の手紙』は，その有名な第3章——「アメリカ人とは何か」（What is an American?）——で，アメリカを田園的な言葉で描写しており，18世紀のアメリカの現状を示すものとしてしばしば引用される。

まず，彼がアメリカおよびアメリカ人を，常に，「新しい」（“new”）という形容詞を付して説明しているのに注目すべきである。たとえば彼によれば，アメリカ人とは「新しい原則に基づいて行動する新しい人間」であり，「新しい思想」と「新しい考え方」の人間なのである。[41]

人間が新しい，新しくなるということは，新しく生まれかわること，すなわち「再生する」（“regenerate”）ことを意味した。このような変化——クレーヴクールはこれを「驚くべき変化」といっている——は，ヨーロッパ人のアメリカへの移住——クレーヴクールは「移植」（“transplantation”）といっている——によってのみ可能だったのであり，ヨーロッパにとどまっていたならば想像すらできないことであった。ビュッフォンやレイナル等のアメリカ退化説はこのような事実を示されては，その根拠をまったく失うものではなかろうか。

次に，クレーヴクールが勤勉と農業の営みと土地の自由所有とを，ほとんど同義に解釈していたことが指摘されよう。ヨーロッパ人がアメリカ人として生まれかわるのは，「彼らの勤勉の力」によるところが大きい。なぜなら，勤勉が「それまで野蛮であった地域をよく肥えた，より秩序だった美しい土地」に変えるのであり，このようなはげしい労働の報酬として彼らは自分の土地を所有できるようになるのである。[42]つまりアメリカ人が道徳的であるという

39) “Information to Those Who Would Remove to America” (1784). 訳文は久保芳和訳「アメリカへ移住しようとする人々への情報」（前掲『世界の思想』第7巻）121～8ページによる。

40) November 19, 1774; Quoted by Paul W. Conner, *Poor Richard's Politicks: Benjamin Franklin and His New American Order* (New York, 1965), p. 35.

41) *Letters from an American Farmer* (1782). 訳文は大窪愿二訳「アメリカ人とは何か」（前掲『原典アメリカ史』第1巻 332～56ページ）による。この箇所の引用は338ページより。

42) 同上342ページ。別の言葉でいえば，土地を耕すことは人間を「純粋にする」（“purify”）作用があ

のは，彼らが「土地の耕作者」(“tillers of the earth”) だからであり，彼らが自分の土地を所有できるようになったのは，彼らが勤勉だったからである。[43]

ジェファソンとクレーヴクールの描くアメリカ社会には本質的な相違はない。いずれも農業がその中心的産業であり，その構成員の大部分は自営の農民である。しかし，レトリックという点からみれば，二人の間には大きな相違があるように思われる。

ジェファソンは「大地で働くもの」の道徳性を強調するのに，特別に一つの項目——たとえば「アメリカの農業について」というような項目——をもうけたわけではなく，製造業および通商についての記述の中でその問題に触れているのである。彼は，農業と製造業および通商を，そして農業に従事するものの性格と製造業および通商に従事するものの性格をコントラスト（対比）させることによって，道徳的にいって，いずれも前者がすぐれていることを強調しようとする。他方，クレーヴクールは，一連の「アメリカの農夫」の賛辞を繰り返すだけである。同じテーマがいく度となく繰り返されており，全体の調子は単調である。わずかに「(アメリカには) 貴族も，王候も，教会権力もない。……いく千の人間を使役する大製造家もいなければ，ぜいたくの極致といったものもない。富者と貧者のへだたりは，ヨーロッパほどに大きくはない」と，述べているだけである。それ故に，「われわれは世界に現存するうちで，もっとも完全な社会をなしている」という彼の結論も，比較するものが提示されていないという意味において説得力に欠けているように思われる。[44]

〔ジェファソンの農本主義についての問題点〕

(1) 産業主義および通商主義との関連

ジェファソンの政治理念および経済思想が——多分にレトリカルではあっても——農本主義の原則に基づいたものであることは，今までみてきた通りである。しかし，彼の思想を重農主義 (physiocracy) と同一にみなすのは，一応の理由はあるにしても誤りであろう。確かに彼がフランソワ・ケネー (François Quesnay) 等の，いわゆる重農主義者の影響を受けていたであろうことは十分考えられるが，農業以外の経済活動——たとえば製造業——に対する彼の考え方をみてみると，ジェファソンが必ずしも農業のみを重要視していたのではなかったことが判明するからである。

まず第一に，彼は少なくとも大統領就任以後は，農業とならんで製造業の重要性を強調するようになった。[45] 第二に，自由貿易の主張者として，彼がケネーのみならずアダム・スミス (Adam Smith) の影響をも受けていたことに注目すべきである。[46] 第三に，ジェファソンがアメリカ社会の理想像として独立自営農民と彼の住む社会を描いたのは，アメリカの経済的基礎は農業にあることを示すよりは，むしろ独立自営，土地の自由所有，農業社会という言葉から連想される道徳的意味や自由・平等の概念を強調するためであった。

『覚え書』の中の次の一節は，以上述べた三つの点を要約しているように思われる。

るのである。(同上340ページ)

43) 同上334ページ。

44) 同上333ページ。

45) Thomas M. Craganはジェファソンの製造業についての考え方は，1790年頃から変ったとしている。しかし，これは彼の考え方に根本的な変化があったとするよりは，公的な立場での彼の発言が変ってきたと解釈すべきであるとも Cragan はいう。ジェファソンは理想主義者であると同時に，現実主義者だったことに注目すべきである。(“Thomas Jefferson's Early Attitudes toward Manufacturing, Agriculture, and Commerce”, Unpublished Doctral Dissertation, The University of Tennessee, 1965)

46) Joseph Dorfman はジェファソンを「商業的＝

「大工，石工，鍛冶屋は農業にも必要である。しかし〔その他の〕製造業全般の仕事は，これをヨーロッパにおけるわれわれの工場でやらせればよい。……大西洋を横断して商品を運ぶ損失は，政治が恵まれ永続きすることよってつぐなわれよう。」[47]

これはすでに引用した「質問19」からの一節であるが，この時点においてジェファソンが最少限の製造業の必要性は認めていたのは明らかである。そして約20年後の1805年には，「アメリカの製造業者は，農業に従事する住民と同じように独立心があり，道徳的である」と書いている。[48]この20年の間に，製造業ならびに製造業者に対する彼の評価は大きく変った，と考えられよう。1816年に書かれたベンジャミン・オースティンへの書簡は，彼の考え方のこのような変化を如実に物語っている。

「生活に必要なものを手に入れるのに他人に依存しないですむには，われわれは自ら（それを）製造しなければならない。われわれは，いまや土地耕作者と製造業者を並べて考えなければならない。」[49]

とすると，製造業は道徳的に望ましくない影響を及ぼすというジェファソンの前提はどうなるのであろうか。「土地耕作者と製造業者を並べる」のは矛盾したことではなかろうか。これには二通りの説明が可能である。一つは，製造業はヨーロッパでは人びとを卑屈にし，道徳的に堕落させるかもしれないが，アメリカではそのようなことはないという説明である。ヨーロッパの制度や思想は，クレーヴクールの言葉を借りれば，アメリカで再生されより純粋なものになるというのである。また，アメリカには「未開の広大な土地」が存在するので，アメリカの製造業者は腐敗することはないというのである。このような確信があったからこそジェファソンは――そしてフランクリンも――製造業はアメリカ人の需要を満たし，より大きな幸福をアメリカにもたらす，といえたのである。（しかしジェファソンのこのような予測が楽観的すぎたことは，その後のアメリカ史の経過が示すものである。）

もう一つの説明は，状況の変化である。つまりアメリカを取りまく国際情勢の変化および国内の発展が，製造業の重要性を認めさせるにいたったのである。ヨーロッパでのナポレオン戦争の影響やイギリスとの外交関係の悪化，あるいはアメリカの西部への拡張は，国内で製造業を起こし，工業製品の需要を自給自足することの必要を感じさせたのであった。

このような状況の変化は，ジェファソンの自由貿易の立場をも変えさせたのであった。彼は大統領として Non-Importation Act (1807) および Embargo Acts (1807～09) を成立せしめたであるが，これらの政策的措置がいかなる目的で決定されたにしろ，外国との通商によって必需品を確保するというジェファソンのヴィジョンは，結果的には修正されなければならないことを意味した。[50]

ジェファソンがアメリカの自然に道徳的意味を見出し，そこにアメリカの存在意義および使命観といったものの根源を求めていたとは，本稿ですでに指摘したところである。したがってここでは，単に彼の描く理想的社会は，かりに当時のアメリカがそのような社会であったとしても（実際はそうでなかったが），あくまでも一つの理想であり，その存在は理論上だけのものであったと付記するにとどめたい。

農本主義的民主主義者」（"Commercial Agrarian Democrat"）と呼んでいる。（*The Economic Mind in American Civilization, 1606～1865* (New York, 1946), Vol. 1, pp. 433～47.）

47) *Notes*, "Query XIX"（注（35）参照。）

48) Quoted by Marx, *op. cit.*, p. 159.

49) "To Benjamin Austin", January 9, 1816; Quoted by Dorfman, *op. cit.*, p. 443. オースティンはマサチューセッツ州の富有な商人で，熱心なデモクラットであった。

(2) 「自然への回帰」の哲学との比較

ヴァーノン・L・パリントンは，ルソーのいわゆる「自然への回帰」の哲学がジェファソンの政治理念の根底にあったとし，次のようにいっている。「彼は財産権についてのロックの哲学よりも，（ルソーの）自然への回帰の哲学……に，ヴァージニアの経験および彼自身の性格と一致するものを見出した。」[51]ジェファソンの農本主義は――一般に彼の政治理念や経済思想全般は――果して，ルソーの哲学と共通する要素を，パリントンが考えているほど多くもっていたであろうか。パリントンの自由主義的バイアスはよく知られている。また，ジェファソンが（ヴァージニア西部の）ピードモントの中産階級出身であったことから，いわゆるジェファソニアン・デモクラシーと（アパラチア山脈を越えた）西部を結びつける傾向がある。この点も考慮しなければならない問題である。

西部フロンティアの住民をさして，しばしば「自然の子」（"the child of nature"）という呼び方が用いられる。彼の生活環境が自然の状態に近かったからである。しかし，アーサー・K・ムーアによれば，彼の精神構造は「自然の子という定義により」，啓蒙思想とは対立するものであった。[52]

ムーアはケンタッキー・フロンティアズマンの思想についての研究から，次のような結論を出す。いわゆるフロンティア精神は，ジェファソンに代表される幅広い知識の追求，科学的観察，宗教上の寛容さ，道徳性――総じて啓蒙思想の精神と呼ぶことができよう――からは，あまりにもかけ離れた性格のものであった。フロンティア精神の持ち主は，ある意味で民主主義のトーチベアラーであったといえようが，教育の普及，政治への参加などに関しては無関心であった。彼は，自分の「生命，自由，幸福の追求」の権利の保障をジェファソンの尽力に負うところが多かったにもかかわらず，ジェファソンの価値観や人生観をアパラチア山脈を越えてまで帯同しようとは思わなかった。実際に「西部は文化的に後退したのであり，本質的には啓蒙思想の合理主義的，社会的，政治的，神学的遺産を放棄したのである。」[53]

フロンティア精神が啓蒙思想の伝統と矛盾したのは，当然予想されたとはいえ「皮肉」なことでもあった。生活条件がきびしく，知的活動を生む基盤が容易に存在しえなかったことを考えると，フロンティアズマンに多くを期待することは無理だったかもしれない。しかし，ジェファソンの描く田園的社会が，フロンティア社会を前提としたものではなく，またそこからインスピレーションを得たものでもないことは明らかであろう。

同様に，クレーヴクールもまた「自然の子」に対しては批判的であった。彼はアメリカ人を(1)「海辺に住む人びと」 (2)「森林地に住む人びと」 (3)「中間開拓地に住む人びと」に区別しているが，彼の描く「新しい人間―アメリカ人」は，「中間開拓地」の住民であり，「森林地」の住民ではなかった。開拓地には平和と秩序がみられたが，森林は無秩序と混乱が支配していた。そこで彼は後者を「戦争状態」（"state of war"）と呼んだ。

---

50) ジェファソンの思想と行動にしばしば一貫性が欠けていたことを指摘するのは容易である。しかし，それをもって彼が偽善的であったとするのは早急である。思想と行動の不一致が，彼の弱点であったとともに，彼の強みでもあったことを理解すべきである。Richard Hofstadterは彼を「民主主義的貴族主義者」（"the Aristocrat as Democrat"）と呼んでいるが，ジェファソンのこのような側面を適確に表わしているように思われる。（*The American Political Tradition and the Men Who Made It* (New York, 1948); Vintage Books Edition, pp. 18～44.）

51) Vernon L. Parrington, *Main Currents in American Thought*, 3 vols. (New York, 1927～30); Vintage Books Editton, Vol. I, *The Colonial Period*, p. 349.

52) Moore, *op. cit.*, p. 209.（注 (2) 参照。）

53) *Ibid.*, p. 246.

「その戦争は，まず人間対人間の戦争であり，これはある時は腕力によって，またある時には法律の力によって勝敗がきまる。もう一つの戦争は人間がこの千古の大森林から追いたてることになった野生の動物との戦いである。そこでは人間は野生動物を獲えればその肉を食い，それができない時には穀物を食って命をつないでいるのだから，人間も高等の食肉獣にくらべて大差はない。」[54]

ジェファソンやクレーヴクールがかりに「自然に返れ」といったとしても，彼らは，人間は文字通りにこのような戦争状態に戻るべきである，といっているのでない。むしろ文明の始まる以前に人間が営んでいたであろう，そして当時のアメリカに存在したと考えられる簡素な生活を目指すべきであると主張しているのであり，この意味において，彼らの農本主義は――たぶんクレーヴクールのほうがジェファソンよりもその傾向が顕著であるといえよう――保守的な面があった，ということもできよう。

む　す　び

ジェファソンの描くアメリカは，荒野でもなければ完全な田園でもなかった。彼の知っているヴァージニアの自然は，かなり人間の手が入っていた――ベヴァリーによれば「改善されていた」――のである。いわゆるフロンティア・ラインは，当時，すでにヴァージニアのはるか西方に移動していた。彼の描くアメリカが完全に田園的であったといえないのは，羊使いのかわりに自由土地所有者が，なだらかな牧草地の代りに手入れの行き届いた開墾地がその中心的題材となっており，製造業が起こっていることを示す工場もその中に見出されるからである。さらに，彼の「荘厳な」(“sublime”) という言葉の使い方は，すでに19世紀のロマン主義者のそれと共通するものがあった。

かくてジェファソンのアメリカ自然観は，いくつかの意味において，「中間的」であったといえるのである。

(1) それは17世紀の「征服されるべき荒野」という自然イメージと，19世紀の「観賞の対象としての自然」あるいは「インスピレーションの源としての自然」というイメージの中間にあり，主に田園風景を描いたものだった。

(2) それは東部の既存社会と西部のフロンティアの中間に位置する，「中間開拓地」を前提としていた。このような開拓地は地理的に，比較的早くから開かれ商業の発達した東部と，ほとんど未開で狩猟の段階の西部にはさまれた，農業中心の地域であった。

(3) このような自然観からみちびかれる理想的社会像は，本質的に「戦争状態」にある原始社会と，「ぜいたくで堕落した」ヨーロッパの都市社会のいずれにも属さず，誠実で勤勉な自由土地所有者＝耕作者がその主要構成員である社会であった。

ジェファソンの自然観は審美的，経済的，政治的，さらには歴史的にも，その中間的性格によって特徴づけられる。それは，あらゆる事物現象は調和的関係にあるとみた18世紀の啓蒙思想に符合する性格のものであり，このことはまさにジェファソンが啓蒙時代の産物であることを示す，一つの有力な例であるといえないだろうか。[55]

---

54) 前掲訳341ページ。

55) Marx は，ジェファソンの求めていたのは「中間的景色」(“middle landscape”) であったと解釈する。彼のいう「中間」とは，極端に原始的でもなければ極端に文明化しているのでもない，「自然と文明」が適度に混合している状態である。しかし Marx の「中間的景色」というとらえ方は，文明がつねに自然を破壊する性質のものである以上，その達成は不可能のように思われる。この矛盾はどう解決すべきであるかは未解決のままである。しかし，ジェファソンは製造業が――あるいは機械化ということが――アメリカの自然をいかに変化させるかについて楽観的すぎる，という Marx の指摘は注目すべきである。(*op. cit.*, pp. 23, 122, 159.)

ジェファソンのアメリカ自然観——ということはフランクリンの，クレーヴクールの，いいかえればその当時の大部分のアメリカ人の自然観である——が，アメリカの将来の発展にどのような影響を及ぼしたかは，すでにヘンリー・N・スミス等によって歴史研究のテーマとしてあげられてきた。[56]このことは，アメリカ自然観が単に自然の事物現象についての審美的価値認識というだけでなく，アメリカの存在意義といった問題を含めて，いくつかのコノティションを有していたことを証明するものではなかろうか。自然に対するイメージ（自然観）が，歴史要因としての思想の力を探究する一例として今後の課題として検討されることを期待するものである。

56) たとえば H. N. Smith の *Virgin Land* はいわゆる「西部の神話」を，それがアメリカ人の思想・行動に及ぼしてきた影響という点から多角的に分析しているし，C. L. Sanford はアメリカ人の対ヨーロッパ意識という点を強調する。（注 (2) 参照)。アメリカ政治における農本主義の伝統という問題も，広い意味での自然イメージ研究の範囲に入るであろう。たとえば Richard Hofstadter, *The Age of Reform from Bryan to F. D. R.* (New York, 1955); Marvin Meyers, *The Jacksonian Persuasion; Politics and Belief* (Stanford, 1957) などがある。

同志社アメリカ研究

第2号

1920年代におけるアメリカの日本像—「イメージ研究」の一試論
（麻田貞雄）

アメリカ市民権の喪失（藤倉皓一郎）

講演：1920年代のアメリカ (Merle Curti)

講演：アメリカ作家と政治，1920—1940 (Norman H. Pearson)

書評

第3号

ＴＶＡの電力事業（松井七郎）

アメリカ連邦制度の諸起源 (Merrill Jensen 池本幸三訳)

アメリカ的生活様式の形成—1920年代における消費構造の変化
（田口芳弘）

インテレクチュアル・ヒストリーについての一考察
—マール・カーティの著作を中心として（明石紀雄）

文献紹介

書評